

狐岩きつねいわ佐用町さようちよう

むかし、佐用の里に与四という人がいました。家は大へん貧しく、年とった母とくらしでいる孝行者でした。

ある日、山へ入って薪をとっていましたが、夕ぐれになり、山で会った美しい女の人をつれて家に帰りました。母も大へん喜び、与四とその女の人は夫婦になりました。この女の人は大へん老母によく仕えてくれるので、与四も安心して毎日山に入って働くことができ

ました。

家には平和がつづき、家のくらしもだんだんよくなっていきました。やがて一人の男の子が生まれました。母も大へん喜んで大事に育て、子どもの名を市坊と呼びました。市坊が三つの年の秋、老母が死んでしまいました。夫婦は悲しみの中で野辺の送りをすませたのでした。

老母の葬式をすませたその夜、与四は夢をみました。妻がさめざめと泣きながら訴えるのです。

「わたしは人間ではないのです。年とった狐です。あなたがあまりにも孝行で、よく老母につくされるのに感心して、かりに人間の姿

となつてあなたを助けにきたのです。今はもう母上も亡くなられ、わたしの用事もなくなりました。心残りも多いが帰らねばなりません。わたしの命は来年のきょうで終ります。あわれと思われたら谷をたずねて来て下さい。」

与四は夢からさめました。おどろいて横を見ると妻の姿がないのです。泣き出す市坊をあやしなから、そのへん一帯を探しまわりましたが、とうとう妻を見つけ出すことはできませんでした。

（ああ私の妻は狐だったのか。名残りおしく思うがどうにもならない…。）

市坊をいたわり育てながら一年を待ちまし

た。

その秋の日、妻のことを思い出しながら、市坊の手を引いて山の谷あいを登っていきました。と、そこに今まで見たこともない一つの大きな岩が現われていました。これこそ妻の身の果てに違いないと、涙を流しながら念仏をとなえて時を過ぎました。

それから、毎年親子で供養をつづけたので、この岩を狐岩というようになりました。

まもなく与四も死んで市坊はみなし児になりましたが、仏法を信じ、習わないのに仏教の奥義に通じていました。

そうして、やがて、自分の出生のいわれを知り、十三歳のとき父母の供養のため法華経

を書き写そうと決心しました。紺色の紙を買
い求めて軸にし、わが身を切って血を出して
は筆を染め、法華経を書き写しました。八軸
全部を書き終り、その前に正座合掌しながら
大往生をとげました。

里の人たちは、それをあわれみ谷に葬りま
したが、その谷を市坊が谷といって今も残っ
ており、血書の法華経は白雲山慈山寺に納め
られ、宝物として残されているといひます。

